

はじめに

目的

ムエタイは、タイでは一般に戦乱の時代に生まれ、軍事訓練として伝承されてきたと考えられている格闘技である¹。このムエタイは、第二次世界大戦前にリングで闘う近代スポーツとして現在の形になり発展してきた。ルールは、拳にグローブを着用して、打つ、蹴る、また組んでの肘打ちや膝蹴りを認めている。ムエタイ試合は、必ず宗教的な儀礼が伴い、教訓などを大切にする伝統的な格闘技でありながら、本来は違法である賭博が伴うのを例外的に許容する格闘技でもある。本研究では、ムエタイが近代的なルールで行われるようになった後、ムエタイ賭博の影響によってムエタイの伝統的な「理念」と「技法」が変容したことを明らかにする。

そもそもムエタイは、現在日本で行われているキックボクシングやK-1のルーツであり、これらのようなムエタイを模倣して創られた新興格闘技の団体では、ムエタイの技術を修得するために、本場タイからムエタイのコーチを招聘しているジムも多い。しかしながら、このような新興格闘技選手と現在のムエタイ選手では、技の使用方法や勝負観に違いが見られ、観客が求めている「闘い方」にも違いが見られる。分かりやすく言えば、ムエタイと日本の新興格闘技では、選手が「相手を倒す」という心持ちや、「理念」そのものに違いが見られるのである。近代柔道に倣う言葉で説明するならば、「一本」を取る勝負観の点で違いが見られるのである。一方、現在のムエタイは、一本を取る勝負方法でなく、「技あり」や「効果」を積み重ねて勝利を得るスタイルとなっている。新興格闘技では判定勝ちよりもKO決着やTKO（ノックアウトやテクニカルノックアウト）が三割以上である場合が多い。しかしながらムエタイでは、十試合の興行の内、KO決着はあっても一試合あるかないかであり、一日の興行の内、KO決着がなく、すべて判定勝ちの興行で終わるケースがほとんどである。新興格闘技とムエタイの間にある差異は何か、両競技はルールが若干異なるが、現在のムエタイは明らかにKO狙いではなく、自分自身を守るための護身的な技法が重視され、けがを出来るだけ回避するような攻撃方法が用いられている。その上、5ラウンド後半を過ぎると相手選手をKOできるチャンスがあっても相手を攻撃するのをやめてしまうのである。

また、初回の1,2ラウンドは、選手同士が攻撃をしあうこともなく、両方が距離を取り合い、空蹴り、空打ちばかりを多用し、本気で闘っているようには見えない。

タイ人の古いムエタイファンやムエタイ関係者、往年の名選手によれば、「ムエタイは、数十年前は、多彩な技でKO決着が続出し、毎試合激しい打ち合いが見られる過激な格闘技であった」と言う。タイでの人気もかつては他の娯楽を凌ぎ、ムエタイのチャンピオン

¹ムエタイに関する先見的な研究者である Peter Vail (Vail 1998, p57) は、軍事訓練であったと言う言説には、はっきりした根拠がないと述べている。

であれば、タイ国民のスターであると言われるほど、国民を歓喜させるスポーツであったのである。しかしながら、現在は、タイのムエタイブームはスタジアムを離れてしまい、その代わりとしてサッカーに代表される国際スポーツに人気を独占されるようになったと言う。

筆者は、1988 年より日本においてキックボクシングを修練していた。その頃、日本のキックボクシング界では、キックボクシングの手本と言えばタイで有名選手が繰り広げるムエタイ試合であった。筆者が本場タイを訪れたのは 1993 年であった。一ヶ月の間、現地のムエタイジムに合宿しその技術の修得を試みた。本格的なムエタイ修得のための長期滞在としてタイを訪れたのは 1999 年であったが、その頃スタジアムで見たムエタイは、既に技法が以前にビデオなどで手本としていたムエタイとは異なるものになっていた。

ムエタイの帝王とよばれ、七つのチャンピオンベルトを巻いたアビデット・シットヒラン²は、ムエタイ雑誌のインタビューに「今のムエタイは、ビジネスになってしまった³」と語っている。彼のような発言をする OB ムエタイ選手は数多い。ドイツのムエタイ選手であり、ムエタイの教本を執筆するクリストフ・デルフも「今日、スタジアムやTVで観戦する観客たちは、おおむね賭博に関心を寄せている。誰が勝つかに焦点が当てられており、さまざまな種類の魅力的な技術には注目されていない。」⁴と述べている。このような発言は、多くのムエタイの競技者やムエタイの師範にも見られる。伝統ムエタイの師範であり、ルンピニースタジアムの初代支配人であったケートシーヤパイは、ギャンブルゲーム化したムエタイについて「近頃のムエタイの試合は、二匹の犬が噛み合っているようである。」⁵と発言している。

なぜ、このように現在のムエタイが評されるようになったのか、何がムエタイに影響を与え、変容させたのか、本研究の問題の所在はここにある。どのようにして現在のムエタイの勝負観が生まれたのか、なぜ倒すか倒されるか分からないような緊張感のある激しい試合が見られなくなったのか。本研究では、ムエタイ賭博の要素が大きくなったことによりムエタイの理念と技法が変容したとの仮説を立てる。

² 1960 年代～1980 年代にかけて活躍したムエタイの大スター。生涯戦績約 320 戦 295 勝 25 敗。

³ 「MONTHLY MUAYTHAI」SISICO PROMOTION 創刊号 2001p18。

⁴ Delp 2002,pp3-4。

⁵ Maliszewski 1996,p222。

研究の対象と方法

ムエタイの正式な発音はムアイタイに近いが、日本ではムエタイとして知られる為、ムエタイとして論を進める。研究の対象はタイで行われているムエタイであり、タイ以外でムエタイと名付けられ興行されていても本研究の対象の範疇には入らない。また、本研究はタイのメインスタジアムであるラジャダムナンスタジアムとルンピニースタジアムを対象とする。ラジャダムナンとルンピニーの二大スタジアムはムエタイの世界では排他的に影響力が強いからである。この両スタジアム以外で行われるムエタイは、基本的な技法や理念をラジャダムナンとルンピニーに求めているのである。また、歓楽街などで行われるムエタイ興行は、外国人の為の余興として賭博が行われないイベント的興行であるのが専らであって、技術が未熟な少年選手や非ムエタイ選手以外を含むため、本研究の対象としない。

研究は、フィールドワークと文献資料をもとに行っている。文献については、タイ語で書かれている文献は、初出時において「アルファベット表示」になおし、()において英訳を付した。また、フィールドワークは1999年5月から2002年3月までタイのバンコクに滞在して調査を行ってきた。また現在でも断続的に調査を行っている(2007年8月最終現地調査)。さらに、東北タイのイサーン地方、チェンマイ、南タイ(イスラーム文化圏であるパッター)などについても短期の調査を行ってきた。調査地域は、以下に記述する。

筆者はムエタイのプロ選手としての活動からムエタイ社会に人脈を持ち、ムエタイに関わるさまざまな人々(ムエタイ選手、トレーナー、ムエタイファン、興行主、ギャンブラー等々)から聞き取り調査を行った。そして、筆者はムエタイの調査者であると同時に実践者でもある。特に、ラジャダムナンスタジアムでも試合を行っている。その経歴を活かして、本論文ではムエタイのイーミックな情報を重視した。ムエタイの技術や試合運びなどについての情報である。こうした情報はプロ選手経験が深く理解しうるものであり、ムエタイの賭博化変容について考察するに際し大いに役立っている。

その他、本文中、特に注記がない場合は、筆者のフィールドワークによる聞き取り調査の情報に基づいている。引用文献、参考文献に関しては、ページ末の脚注に示しているが、引用文献に「」で括り太字にて表記している。また、本論文中の写真等は研究内容をより分かりやすくするため用いたが、これらの個人を特定できる写真等は本人の了承を得ている。

調査期間と調査地

(調査を行ったジム)

(バンコク)

カセサート大学 ボクシング部 (バンコク、バンケン地区) 1999.5.21 ~ 2000.12.20 在籍

KASETSART UNIVERSITY BOXING CLUB

マイモンコンジム 1999.9.22 ~ 1999.12.28 所属

MAI MONGKORN GYM

ムエタイ・インスティテュート 2000.1.10 ~ 3.15 所属

MUAYTHAI INSTITUTE

カイモエ・ルークタパカア 2000.3.19 ~ 2000.12.18 所属

KAIMUAY LOOKTAPRAKA

シットヨートンジム 2000.1.28 インタビュー。

SITYODTHONG GYM

サシプラパージム 2000.2.5 インタビュー。

SASIPRAPA GYM

ポーパオインジム 2000.2.9 インタビュー。

POPAOIN GYM

ゲオサムリットジム 2000.10.2 インタビュー。

KEIWSAUMRIT GYM

ギャットンユットジム 2000.10.2 インタビュー。

KEATYONGYUT GYM

ソーチラダジム 不定期に調査。

SORJIRADA GYM

ビッグショットジム 2002 頃 ~ 2006.3.28 まで 不定期に調査

BIG SHOT GYM

チュワタナジム 2002 頃 ~ 2006.8.31 まで 不定期に調査

CHUWATANA GYM

ソンブンジム 2006.4.2 インタビュー。

SONBUM YM

(地方)

カイモエ・シッチャーチュワン (ヤソートン) 1999.11.10 ~ 11.12 インタビュー

KAIMUAY SITYJACHUAN

カイモエ・シットソントン (コンケン) 1999.12.17 インタビュー。

KAIMUAY SITSAMTON

ペットポンカンジム (パッタニー) 2000.7.28 インタビュー。
PECHPONGKARN GYM
チェンカンジム (ルーイ) 2000.9.7 インタビュー。
CHIENGKARN GYM
ギャブッサバージム (チェンマイ) 2006.3.25 インタビュー
GYABUSSABER GYM
レジェンドジム (ウボンラチャタニー) 2007.8.7 インタビュー
LEGEND GYM
ヌンウボンジム (ウボンラチャタニー) 2007.8.7 インタビュー
NUNG UBON GYM
ポーウボンジム (ウボンラチャタニー) 2007.8.8 インタビュー
PO UBON GYM

先行研究の検討と本論文のオリジナリティー

現在、ムエタイに関して出版されている一般的な書籍には、旅行者向けにムエタイを紹介したもの、外国人格闘技ファンのための技術書、ムエタイ賭博を行うタイ人の為のムエタイ新聞やムエタイ雑誌などがある。

これに対し、ムエタイの歴史や文化を扱った出版物は少ないが、タイ国立文化委員会が編集した『SINRAPPA MUAYTHAI (菱田注: Art of Muay Thai)』(1998) や Panya Kruits の『MUAYTHAI』(ASIA BOOKS , 1988) などは、ムエタイを包括的に述べたものであり、資料として価値が高い。これらは、ムエタイの技術の他、儀礼や伝承についても扱っている貴重な資料である。外国人ジャーナリストとしてムエタイを海外に紹介した Hardy Stockmann の『THAIBOXING the art of Siamese-Unarmed Combat』(1979) は、ムエタイの歴史や儀礼だけでなく、海外への伝播や外国人格闘家との試合などを扱い、近代化以降のムエタイ社会の動向やムエタイ選手のジム生活にも言及している。また、Kat Prayukvong は『MUAYTHAI A Living Legacy』(2001) でムエタイの歴史、技術、儀礼に関して詳述するが、前近代ムエタイについて伝説を多く紹介している。

ムエタイに関する博士論文としては、コーネル大学の Peter Vail が『Violence and control : social and dimensions of boxing in Thailand 』(1998) を著している。これは、長期間の参与観察によってムエタイをタイ文化の中で総合的に論じた先見的な研究であり、後の諸研究に影響を与えている。彼はムエタイの言説がタイの歴史と文化の中で如何に創られてきたかを述べ、近代ムエタイ成立の背景にあるタイ社会の歴史的変容を論じる。さらに、フィールドワークに基づいて現在のムエタイ社会を民族誌として報告する。それは農村の寺祭りや、ムエタイ社会で生きる人々の生活や試合のルール、賭博などの広範囲に及び、仏教、倫理、男らしさ、神話、政治、暴力そして階層間移動など、さまざま視点が

らタイ文化の中のムエタイの意味について論じている。

Peter Vail の論文を基に、近代のタイ社会におけるムエタイの役割について論じたものに、チュラロンコーン大学の修士論文として提出された Apisake Monthienvienchai の『The changes in the role and significance of Muaythai, 1920-2003』(2004)がある。これは、タイの近代史における「ムエタイの意義と役割」を扱ったもので、タイ近代化においてムエタイは八つの役割を担ったと指摘する。すなわち、護身術、祝賀記念、経済発展、賭博、国民の象徴、国民的な娯楽、観光資源、国際スポーツである。筆者(菱田)は、彼が挙げた役割の中では賭博が最もムエタイの理念と技法の変化に影響を与えたと考えている。

また、Pattana Kitiarsa は、タイ人のネイティブな文化人類学者として『Lives of Hunthing Dog』(2003)と題するムエタイの民族誌を著し、Vail 論文を補強している。ムエタイから見通せる男らしさについて論じているが、ムエタイ選手は、知名度をあげて経済的に裕福になっても、その社会的な位置は以前と変わらないとも指摘する。

さらにまた、Lois Ann Dort は、『Sport, tradition and women in competitive muay thai』(2004)をチュラロンコーン大学の修士論文として提出している。これは、女性とムエタイの問題を扱ったもので、本論文ではタイのナショナリズムと近代ムエタイの理念を考える上で大いに参考になった。

こうした先行研究では、現在のムエタイがギャンブルスポーツの側面を持っている事、賭博の影響によってムエタイの技法やムエタイファンなどに変化があったとの指摘は見られる。しかし、そうした内容は指摘の域にとどまっている。ギャンブル化したムエタイが独特の理念や技法を持ち得た過程については十分に再構成されていない。本研究のオリジナリティーはここにある。ムエタイが賭博の影響によって、如何に変容したかが本研究で扱われる。

用語説明

本論文では以下の語を以下の意味において使用している。

ムエタイ = 各時代のムエ(武術)の総称

ムエボラーン = 近代スポーツ化以前のムエタイ

ムエカッチュアク = 拳に紐を巻いて闘うムエタイ

近代ムエタイ = グローブを着用し、リングで闘うスポーツとなったムエタイ

ギャンブルムエタイ = ギャンブルをムエタイの興行の第一目的として行われるムエタイ